

鎌倉末——南北朝の唯識宗

富 貴 原 章 信

—

尋尊の大乗院寺社雜事記には（文明元、八）、当時、興福寺に存在した諸院諸坊が記録されている。そのうちに、東院松林院、東北院、西南院、喜多院、修南院など、有力な寺院が見られること先論であるが、なおその他に、百六十余の院名が列挙されるのである。そのうちに竹林院、北戒壇院、勝願院、佛地院、慈恩院、三藏院、法雲院など、いづれも鎌倉時代より、その名が見られるものもある。もちろん、それらの寺院は、いづれも連綿と相承されたといえな
いが、しかしすでに鎌倉時代に、その名が見られるのである。そしてこれらの諸院は、文明年間に、興福寺にあった百六十余の塔中寺院に比すれば、わずかに、その一割ほどにすぎない。おそらく、これらの諸院は、有数の塔中寺院であったであろう。

そして尋尊の雜事記より、およそ百年後に記録されたものに、英俊の多聞院日記がある。この多聞院日記にも、また当時、興福寺にあった院坊の名が、いろいろ記されるのである。そのうちに、前記の諸院が見られること先論であ

るが、なおその他、多くの院名が記されている。いま尋尊、雜事記の寺中諸院諸坊事という中にも、また多聞院日記のうちにも見られるものを記すならば、

阿弥陀院	安養院	觀禪院	北角院	吉祥院	窟之院	花藏坊	光林院
興善院	金勝院	西林院	慈明坊	持宝院	积迦院	清淨院	成身院
淨名院	淨瑠璃院	惣珠院	多聞院	知足坊	転経院	南喜院	南井坊
檜皮屋	癸心院	摩尼珠院	明星院	明王院	妙徳院	蓮成院	

などがある。これらの諸院は足利の中期にも、また末期にも存在していたとみられる。おそらく、これら諸院のうちには、さらに遡って、鎌倉時代に存在したものもあるであろう。それが、いづれと、いづれであるか、確たることは不明であるが、しかしそのうち若干のものは、すでに鎌倉時代より存続していたといえよう。

そしてこれらの院坊には、多くの学侶が住していた。若い学侶を六方というが、これら学侶は多くは公家の子弟であった。そのうちには上流の公家もあれば、中流以下の公家もまたあったであろう。そして公家出身の学侶の子弟がさらに出家することもあったが、いづれにしても、これらの学侶は、僧位僧官をうる資格がある寺門の支配層に属していた。

そして興福寺のような大寺には、学侶の他に多くの衆徒が住していた。そのような衆徒のうちには、妻子をたくわえ、刀槍をたづさえるものもあった。そういうものは有事のとき僧兵となったであろうが、しかし常時の法会神事などに出仕のときは、諸僧に同じ装束をつけ、戒藤の次第によって着座したという。また衆徒がすべて僧兵となったのではなからうが、しかし学侶と区別された存在である。

おそらく衆徒は学侶の使用人の子弟、あるいは寺領荘園の地方領主の子弟であったであろう。そして右の諸院のうちには、このような衆徒が住する院坊も、また可なりあったに違いない。そしてこのような衆徒のうちに、学才があ

り、あるいは道心があつて、学侶となる人もあつたのである。このことは、すでに鎌倉時代にあらわれ、とくに学事の方面において、重要な役割を果すようになったのである。

三會定一記、文応元年（二二六〇）探題の下に、権大僧都、專英をあげ、ここに住侶と肩書している。これは專英が庶民出身の学侶なることを示す。またその專英の下に、実の探題ではないが、かわつて勤仕した前例かと註する。このとき実の探題は、大乘院の尊信別当であつたが、何か故障があつたため專英にかわつてもらつた。これについて寺門のうちには、大いに不満をいだくものがあつたという。そのように定一記は註するのである。

およそ三會の探題となることは、当時の学侶として最高の榮譽であつて、庶民出身の学侶がつとめることは、今までにその前例がなかつた。とくに身分ということが、やかましい封建時代において、これは全く破格であつたにちがいない。たとえ破格であつたにしても、それを認めなくてはならぬほど、すでに時代は變つていた。学問の方面ではもはや公家の能力は退潮期にあつたのである。

また定一記、正応五年（二二九二）講師の下に、権少僧都、英禪をあげ、住侶、縁願房、七十五と註し、さらに凡人の僧綱講師、先規これなきか。学効の誉により、これを聴るさる。これ面目というかと記すのである。これによつて英禪もまた庶民出身の学侶であり、ことに篤学の論匠であつたために、七十五という老齢をもつて、講師をつとめたことが知られる。この当時、公家出身の学侶であれば、三十か四十ほどで、すでに講師をつとめたことを考えるならば、身分の相違が僧位僧官を左右してゐたことが知られる。

それにしても、庶民出身のものが一宗学事の方面において、重要な役割を果すようになったことは確かである。ただし英禪の下に先規これなきかとあるが、しかしそれ以前において、すでに專英が宝治二年に、三會の講師をつとめていたから、前例がないといえない。そして一宗学事の方面において、庶民出身のものが重要な役割を果すことは、いまだ前の時代に見られなかつたのである。

前の時代においては、覚憲、貞慶、良遍などが輩出し、これがため大いに唯識宗は復興されたが、しかもこれらの人々は公家出身であった。もとより、この当時においても、藏俊、良算などのように、庶民出身であつて、しかも教学復興のために、大いに功献した人もあるが、しかし良算が三会の講師をつとめ、あるいは探題となつたことを聞かない。おそらく当時においては、いまだ社会的な情勢が、そのことを実現するまで、進展していなかつたからであらう。

また鎌倉の中期以後、公家出身の人が、全く一宗の学事より脱落してしまつたと云えないが、しかしその中心勢力となることはなくなつた。ここに時代の推移がみられる。名もない庶民より出家し、そして道心堅固に修行し、学問に専念する人々のうちから、令法久住のために一生をささげる人があらわれ、そしてそれらの人々によって、一宗の法燈は護持されたのである。もしそういう人がなければ、すでに当時、唯識の教学は滅びていたかも知れない。

そしてそれらの人々は、身分も師承も住坊も不明である。またある人は、その在世年代さえも知ることができないが、しかし正法護持のために、その一生をささげたという貴い功績が、今日までのこるのである。そういう名利をすてた高貴な努力によって、日本において唯識宗は、千余年の生命を保つたのである。ことに戦乱の時代においては、宗教は先視せられ、学問は弊履の如く、すてて顧られない。ちよつど鎌倉時代の末期は、そういう時代であつたが、しかしこの時代においても、やはり法燈をまもりつづける人があつた。

二

興福寺の内紛は、一三二七年に大乘院覚尊と同聖信の間に生じた。これがため、聖信は隠岐に流されることになつたが、それより四年後、聖信は奈良にかえり、そして覚尊が淡路へ流されたのである。その間、衆徒はしばしば金堂にたてこもり、合戦したというが、これは鎌倉幕府が滅亡する三・四年前であつた。

その後、一三五一年に、大乘院孝覚と一乘院実玄と紛争を生じた。その原因は齊恩寺庄において、神人が打擲されたからであるというが（興福寺細々要記抜書）、十七年もつづいたのである。おそらく、この紛争がおこったのは、南北朝の社会的な混乱期に乗じて、地方在地の領主が、自己の勢力を拡大するため動きはじめ、それが中央の権力者に策動してきたからであろうが、これがため寺領の荘園制度は、ますます崩壊に傾いたことは云うまでもない。

一言芳談には、昔の上人は一期、道心の有无を沙汰しき。次の世の上人は法門を相談す。当世の上人は合戦物語るというが、鎌倉末より南北朝にわたり、興福寺の上人たちは、合戦を物語るのみではなく、実に寺門において、自ら合戦していたのである。そういう状態であって、教学の振興ということは全く期待されない。

三會定一記によれば、南北朝、五十八年の間に、毎年、執行さるべき大会が、二十七回、執行されたにすぎない。これによって、いかに寺門が混乱状態にあったか、充分に知ることができよう。このような時代にあつて、令法久住のために尽した人に、いかなる人々があつたかというに、

範縁

その出身など不明である。正中二年、三十六をもつて三會の講師をつとめ、建武二年、暦応元年、同二年の三回、三會の採題となつた。三會定一記には、その最後に大僧都とあり、その後には所見がない。範縁の出生は一二九〇であるから、善憲より三十年の後輩であるが、しかし善憲より三十年も前に、講師となつたのである。あるいは範縁は公家の出身であつたかも知れない。光胤の訓論聞書（大正六六、七五二）には、範縁僧正の説がみられる。おそらく僧正は僧都の写誤であろうが、範縁もまた当時の学匠であつたであろう。

懐融

その出身など不明である。貞和二年、三會の堅義となつた。前に嚴寛が堅義となつたとき、五十一であつたから、おそらく懐融の年輩も、同じ頃であつたであろう。してみると、その出生は一二九七頃となり、前の範縁より七年ほ

どの後輩である。光胤の聞書（大正六六、七八二）には、懷融得業の説がみられる。懷融もまた当時の学匠であつたであろう。

印覚（松洞院）

円覚法印の孫、寛豪法眼の子というから、松洞院顯親（二五三一—三三七）と従兄弟であり、また理趣院印寛の血縁となる。貞治五年、三会の講師となり、ここに定一記には松洞院とある。永和元（三）年に別当となり、同四年に七十三をもって入滅した（别当次第）。してみると印覚は一三〇七—一三七八の人で、前の懷融より十年ほどの後輩である。光胤の聞書（大正六六、七二五）には、印覚僧正の説がみられる。印覚もまた当時の学匠であつたであろう。

また光胤聞書（六二九）によれば、故東院（光晝、一三五九—一四三三）の御物語として、次の説話がたえられる。故印覚僧正が異熟能変の談義をされたとき、この五位（異生、有学、无学、菩薩、如来）を、つねの資糧等の五位のように仰せられた。心のうちで、そうではないと思ひながら、そうは申さないで終つた。明匠もまた下地を御覽なされぬこともあるか。実に人があやまるべきことであると、故東院は述懐されたという。

専重（観識房）

その出身など不明である。貞和二年、法華会の堅義となり（尋尊雜事記、文明十八、五）、応安三年、五十八をもって維摩会の研学となつた。それより十一年の後、永徳二年に定一記には、専重の名がみえるが、その後には所見がない。この頃に入滅したとすれば、専重は一三三十一—一三八二頃の人で、前の印覚より六年の後輩である。大乘院孝尋（一三五九—一四三八）の同学として、その学問を指導し、また光胤の聞書にも観識房の説がみられる（大正六六、七五二—八七四）。専重もまた当時の学匠であつたであろう。

良意（長恩房）

その出身など不明である。貞和四年、三十四をもって法華会の堅義となつた（尋尊雜事記、文明十八、五）。定一記には

全くその所見がない。良意の出生は一三一六であるから、前の専重より三年の後輩である。専重とともに孝尋の同学となり、また光胤の聞書にも、長恩房の説がみられる（大正六六、七五二、八五二）。良意もまた一代の学匠であつたであろう。

寿円（北戒壇院）

その出身など不明である。永徳三年に法華会の精義となつた（尋尊雜事記、文明十八、六）。当時、法華会の精義となるのは、五十五ほどであつたから、おそらく寿円も、それほど先輩であつたであろう。してみると、寿円の出生は一三二九頃となり、前の良意より十三年ほどの後輩となる。また尋尊の雜事記（明応六、八）には、寿円得業が北戒壇院の坊主であり、そして長懷僧正（松林院、一三四二―一三九六）、実雅僧正（同上、一三五〇―一四〇九頃）、光雅僧正（同上、一三五五―一四三二）の師匠であつたという。光胤の聞書（大正六六、七八六）にも、寿円得業の説がみられる。寿円もまた当代の学匠であつたであろう。

重耀（了文房、知足坊）

その出身など不明である。貞治二年、三十四をもつて法華会の堅義となつた（尋尊雜事記。それより十一年の後、至徳元年に三会の研学をつとめた。重耀の出生は一三三〇であるから、前の寿円より一年ほどの後輩となる。一乗院良昭（二三六三―一四〇二）の同学となり、また光胤の聞書（大正六六、六八九）にも、了文房僧都の説がみられる。重耀もまた当時の学匠であつたであろう。

良継（浄恩房）

その出身など不明である。尋尊の雜事記によれば、貞治六年に法華会の堅義となつた。このとき何歳であつたか記されないが、前の良意などに同じく、三十三頃であつたであろう。定一記によれば、応永十一年に三会の講師をつとめ、ここに浄忠房と肩書されているが、おそらく忠は恩の写誤であろう。その後、定一記には応永十三年まで、その

名がみられる。その後まもなく入滅したであろう。してみると、良継は一三三四—一四〇六頃の人で、前の重耀より四年ほどの後輩となる。前の良意とともに孝尋の同学となり、また光胤の聞書にも浄恩房の説がみられる。(大正六六、八五五)。良継もまた一代の学匠であつたであらう。

右の如く、この時代において、庶民出身の学侶のうちから、一乗院、大乘院、両門跡の同学となり、その学事指導にあたる人が出でたのである。これは次の足利時代となつても同じである。前の鎌倉中期までは、公家出身の学侶のうち、とくに学徳のすぐれた人が、両門跡の学事を指導したのである。しかるに鎌倉末より南北朝になると、もはや公家出身の人には、そういう適任者がいなくなつた。良意等は、興福寺の別当にもならず、また僧正でもなかつた。そういう人によつて、両門跡の学事指導が行われたのである。このことは、明かに学問の中心が庶民出身の人々に移つたことを示すのである。

そしてこの当時、いかに学問研究が行われていたか、またその学問研究が前の時代に比較して、いかに変化していったか知る由もない。前記の人々は、光胤の訓論聞書のうちに、その学説の一端が紹介されている。しかるに、それも全く断片的なもので、とうてい、その全貌を知ることができない。当時は興福寺全体が動揺し、混乱していた時代である。それゆえに教学の衰微もまた甚しく、その伝統が絶えないように、後世につたえることに、全力が注がれてきたとみられる。

三

興福寺には、その当時、百にあまる諸院諸坊が存在していた。これら諸院に住する人が、みな学侶であるといえない。そのうちには衆徒が住する院坊も、またあつたであろうが、しかし学侶の院坊も、また可なり存在していたとみられる。若い学侶を六方というが、このような初学者は、まづ何を研究したかというに、しばらく多聞院日記によれ

ば、良遍の二卷抄、観心覚夢抄、百法問答抄、あるいは貞慶の注三十頌などを研究した。おそらく鎌倉の中期以後、そのようになっていたであろう。

つぎに唯識本論を聴講した。これは唯識宗として当然のことであるが、しかも足利時代において、それが訓論となづけられた。尋尊の雑事記にも、また多聞院日記にも、これは随所に記されている。おそらく訓論というは、光胤の訓論聞書にあるように、唯識論の綱要について、討論談義をおこない、もって本論全体の正意を、領解することになったであろう。そして唯識論の講読ということも、やはり鎌倉時代より行われていたとみられる。

良遍の護持正法章によれば、唯識論をひらくことなく、講会の論義をつとめるような人もあるが、これは全く未曾有の非法であり、ために佛法はますます衰微するのであるから、かたく禁止すべきであるという。これは講会の論義が行われるとき、すでに論義の草案は古徳によって幾通りも用意せられ、もはや直接、本論などの研究に、少しも努力しないと、何とか、講会の論義はすまされる状態になっていたからであろう。

しかるに、そういう状態では、論義の的となるところは、果して唯識論全体において、いかなる位置を占めているか、全く理解されないのである。それゆえに護持章には、まづ当巻をよむべしという。ただし、ここによむというもそれは独自に読むことではない。もし独自によむならば、みだりに欺誑することになるという。このように見てくると、唯識本論を訓読することも、おそらく鎌倉時代にも行われていたとみられる。

つぎに訓論とともに行われたのは、講会の論義である。論義は、ある論題について（それを選択決定する人が探題である）問者（堅義）と答者（講師）との間に、おこなわれる討論談義である。唯識論のうち、問題となる箇所について、述記、三カ疏をはじめ、その他、必要な註釈をしらべ、正義をたてて異説を会するために、論義が行われるのである。このような論義を、唯識本論の順序にしたがい編集したのが、すなわち同学抄である。そして同学抄が成立した後においても、また幾多の学匠によって、数多の論草が作られたのである。

また論義が行われる講問にも、大小いろいろのものがあつた。多聞院日記によれば、それに次の三類があつたとみられる。

(一) 寺門の学事において、権威ある学匠が指導者となり、数人、または十数人の学侶が参集し、問者、講師を順次にきめて、一の論題につき講問が行われた。これは毎月一回のこともあれば、隔月のこともあり、年に四回、もしくは二回行われることもあつた。会所は、ある院坊に決定していたこともあれば、また寺中の諸院が順番に引請けることもあつた。

(二) 興福寺において、年中行事として行われる講会がある。それは三蔵会、慈恩会、溜州会、撲陽講、法華会、方広会、長講会などである。これらの講会においては堅義、講師、精義、探題などの諸役が決定せられ、一山の学侶が集まって執行せられた。

(三) 維摩会、御齋会、最勝会の三大会である。この三大会の講師をつとめたものが、三会の已講である。勅使の参向があり、毎年、重要な国家的行事として行われた。

このような、いろいろの講問がすでに鎌倉時代、あるいは、それ以前より行われていたとみられる。良遍の護持章によれば、前の溜州会、撲陽講などに宿徳であるからといって、出仕しないものもあるが、これは寺家の恥辱であると警告している。当時の学侶は、いろいろの講会において、堅義、講師などの諸役をつとめたのである。しかるに、これらの講会もまた数百年の伝統を生ずると、それは全く形式的となつて、種々の弊害を生じていた。良遍の護持章には、これを歎じて、時は澆季となり世は像末である。いよいよ修学は衰微し、わが寺の法滅は余所にすぐという。

ただし法滅の寺門はただ興福寺のみではなく、また延暦寺なども同であつた。沙石集(十下)には、法相、天台の学者は多けれども、末代は坐禅修練して、唯識の観念、円頓の妙行する人も稀なるにや。ただ論談決択をこととし、宗の権実を諷ひ教の浅深を論ず。一期の学は今生のためなれば、臨終には何事をか、なすべきとて、或は念佛、或は真

言、時にのぞみて思わづらふ。まことに渴にのぞみて井をほるが如し。さしも一大事の生死を出づべき計を、平生に能々思したため功をつむべきに、名利のためにのみ学して、最後に臨んで忙然たること可悲可悲とある。いづこも同じ悲しむべき状態であった。

四

そして良遍の時代といえ、それは唯識宗が大いに復興された当時である。すでに解脱上人（貞慶）は入滅されていたが、しかしその厳格な熏陶をうけた人がいまだ在世していた。そういう時代においても、やはり修学のさまたげとなるものに、次のような色々のことがあったという。

(一) 学問を志望しても、寺に住することができないものもあるし、また寺に住していても、学問にたえられず、寺を去るものがあること。

(二) 散乱放逸のものがあること、大酒美食を好むものがあること。これは修学が衰微する、最大の原因となるばかりではない。さらに財物を浪費することであるから、良家（公家出身）のものとはより、凡人（庶民出身）といえども大いに恥すべきである。

(三) 勝負、囲碁、雙六、将棋など、かたく禁止すべきこと。終日、眼を疲れしめ、竟夜、燈をつくして之を行うことなど、学侶の身分として、ふかく慎しむべきである。

(四) 寺中のものが徒らに京都に追従すること、これは権勢に阿ねることである。これによって佛法は衰え、財物は乱費されることになるから、かたく禁止すべきである。

(五) 京童、これは徒党の失であり、散乱のもとであり、また稽古の魔事となるから、決して親近してはならぬ。およそ京童とは京都市中を徘徊する暴力団である。そういうものに連絡のあるものが、興福寺にもまたあったと見え

る。このことは寺中の衆徒のうちに、僧兵がいるかぎり、強ちにないと云えない。

右の如く、種々の弊害が、すでに良遍の時代に見られたのである。そして、これらのことは、また貞慶の修学記にも記されているが、さらに沙石集(四)にも、そういう滑稽談が見られるのである。ある入道は囲碁を好み、冬の夜によもすがら打ちあかした。中風の気があって、手がひえてくるから、かわらけ(土器)で石をあぶって打ち、また油がつきたために、萩をたいて打っていると、その灰が身にふりかかると、ついに笠をかむって打ちあかした。そういう話を、近頃、聞いたことがある。これほどに坐禅修行したならば、悟道も難くあるまいというのである。

また下手の法師で酒を好むものがあつた。无一文のままに、一衣の片袖を解いて飲んでしまった。これほどに三宝を供養し、父母に孝養をつくし、そして悲田に施し、惜しむ心がなかつたならば、感応も空しいことはあるまい。物が無いといつて善事をなさぬのであるが、実は物が無いのではなく、ただ志がないからであるという。

また南都のある寺の僧は、朝粥を食わず、日が高くなるまで眠っていた。どうして粥をめされぬかと、人にたづねられると、粥をすするよりも寝ていた方が、はるかに味がよろしいと答えたという。これほどに法喜禅悦の食を愛したならば、佛道成就もまた遠くはあるまい。その他、詩歌管絃をこのみ、あるいは博奕田獵を愛し、また淫欲にふけり酒宴におぼれるなど、これによって財宝を費し、身命をほろぼす、病にかかり禍をまねくにちがいないという。おそらく当時においては、これが寺門の通弊となつていたのであろう。

沙石集の著者、无住は良遍より三十余年の後輩である。さらに時代がすぎて鎌倉の末期となれば、そのような通弊はますます甚しくなつていた。講会の論義は形式的となり、すでに、その生命は失われてしまった。出家するものはあつたが、道心堅固に修行するようなもの、ほとんどいなくなつた。当時の大寺には広大な寺領がある。生活の安定を求めて出家するものはあつたが、そういうものの中から、大食美食をむさぼり、大酒乱酔におぼれるものが現われた。

博奕雙六にふけるといふ、放縱な生活におちいるものが生じ、このような状態では、一宗の教学がいよいよ衰微することも止むをえない。しかるに、このような時代において、道心堅固に修行し、清貧の生活に甘じて、令法久住のため、一生をささげる人がないではなかった。もしそういう人がなかったならば、すでに唯識宗は当時ほろびていたのである。そしてそれらの人々は、名もない庶民の出身であったのである。

一二七四年に蒙古が来襲したのは、生駒の良遍が入滅して、二十余年の後であった。その当時、鎌倉政府は西辺の防備のために、莫大な兵力財力を消耗した。ついに再度の来襲は成功しなかったものの、幕府は次第に疲労して、ついに窮乏状態におちいったのである。このような社会の窮乏状態は、また寺門のうちに端的に波及してきた。

良遍入滅の直後においては、いまだ解脱上人（貞慶）、良算、良遍などの面授の弟子が生存していたはずであるからたとえ昔日の面目は失われていたにしても、なお復興時代の余勢がのこっていたと云えよう。しかるに、それらの学匠もようやく世を去る頃となれば、一般社会の窮乏にも影響せられ、いよいよ唯識宗は衰微したのである。そしてこの当時において、正法を護持した人は、顕範、縁憲、敵寛などの学匠であった。これは別記のとおりである。

そしてここに注意すべきは、当時の学匠も、また道心堅固なりしことである。顕範は一生不犯の清僧であった。縁憲は令法久住のために一生をささげたが、その在年代さえも明かではない。そういう人には、僧位も僧官も少しも問題ではなかった。おそらく敵寛なども、そういう道心堅固な人であったであろう。

そして敵寛の頃となれば、一乗院大乘院、兩門跡の学問指導にあたる人が、庶民出身の学侶から選ばれるようになった。このことは公家出身の学侶に、そういう適任者がいなくなったことを示す。後の南北朝、足利時代となってもこのことに変りはない。そして鎌倉末より南北朝にわたり、一般社会が混乱におちいったばかりではない。さらに寺門のうちに紛争が生じ、佛堂が修羅場と化したのである。このような状態では、教学の振興など全く不可能なることは云うまでもない。

そして当時の学匠には、寿円、懷融、良継などがあつた。これらの学匠もまた庶民出身である。すでに寺門が戦塵につつまれているときに、正法を護持するということは、難中の難事である。しかるに、その当時において教学の伝統が、とにかく維持されたのである。ことに合戦の当事者が寺門のうちにあるとき、そういう渦中にまきこまれて、法燈がぎえぬように、まもるためには、余ほどの決意が必要である。このように見てくると、当時の学匠もまた道心堅固に、令法久住のために、一生をささげたことが知られる。

ただしそういう時代において、教学の研究に、思想的な発展を期待することはできない。おそらく前代の遺産を後代に伝えることに、全力が注がれていたであらう。三蔵院の範憲が一三二四年に、同学抄を筆写したとき、

行末のなかれ久しきしるへかな

ふるぎ御法のみつくぎのあと

と述懐しているが、これは右の心境を如実に物語るといえよう。

(この小稿は大谷学報四四ノ四、拙稿、「鎌倉後期の唯識宗」の姉妹篇である。参見ありたし。)